今月の
Photo&People

Text＝市井康延

◉かみむら・みつひろ
1948年、東京都生まれ。日本大学芸術学部写真学科中退。四谷スタジオを経てフリー。写真集『壁』（1996年、自費出版）。第23回伊奈信男賞受賞。主な写真展に、「SPECTROGRAMS」、「zoo」、「壁」、「街」など。http://www.ac.auone-net.jp/~kamimura/

神村光洋
「Beyond Infinity」

都心のランドマークをめぐり、気になる一瞬を切り取る

10年ほど、自分の写真を撮らないまま過ごしていた。ソニーα7Sを購入したら、昔使っていたレンズがフルサイズのデジタルカメラで使えるようになった。そこで神村さんの写欲が再燃した。

「僕の根っこはカメラ小僧だから、メカの方から興味が始まっているんです」

フィルム時代はライカ、コンタックスG2などを使っていた。その時愛用していたビオゴン21ミリにティルトができるアダプターを付けたレンズを自作した。

「AFの機構上、無限遠の先にフォーカスリングの遊びがある。普通撮影では使わないけど、そのボケ具合が良いと思ったんです」

無限遠の先が写し出す光景を求めて

無限遠のさらに外側に存在する世界。言葉遊びのようにも思えるが、どこか真剣にそんなイメージを探求したくなった。ピントは合わず、ソフトフォーカスやピンホールとも違う滲んだトーンに包まれる。

「97歳の母を老老介護する身なので、そう遠くまで撮影には行けない」

時間ができると、都心のランドマークをめぐり、気になる一瞬にレンズを向ける。水準器で水平をとり、歪みを修正する。そこでは反射光や映り込みなど、光が起こす光景にとりわけ反応しているようだ。

中学時代、写真部の友人に誘われ、暗室に足を踏み入れた。高校では迷わず写真部に入り、写真を職業にしたいと思い始めた。その頃は写真好きだった叔父を真似て、風景や石仏を撮っていたそうだ。フリーランスの写真家となった当初は忙しく、商業写真の仕事だけをこなしていた。

「結婚して3年ほどで別れることになって、なぜかその勢いで日本を飛び出せたんです」

7回ほどインドを旅したが、旅写真の域を超えず、まとめて発表することはなかった。ただそこで撮る喜びを思い出し、身近な街などにカメラを向けるようになった。

初めての個展は1995年、コニカプラザで開いた「SPECTROGRAMS」だ。高層ビルなどのガラス窓が反射した光が、古い建物を照らす。その歪んだ光が描き出す街の光景を探し、記録した。

98年には、動物園で主のいない空っぽの展示施設を撮影した「ZOO」を銀座ニコンサロンで発表。前者はコニカ「新しい写真家登場」特別賞、ZOOは伊奈信男賞を得た。

「僕は商業写真を撮っていたから、賞を受賞しても仕事には何の影響もなかったね」とあっけらかんと笑う。展示を見た人の中で、数は少ないが、その写真を理解してくれる人がいる。その人たちの存在と、神村さん自身がプリントを見た時に感じる手応えが次の撮影へ駆り立てる。

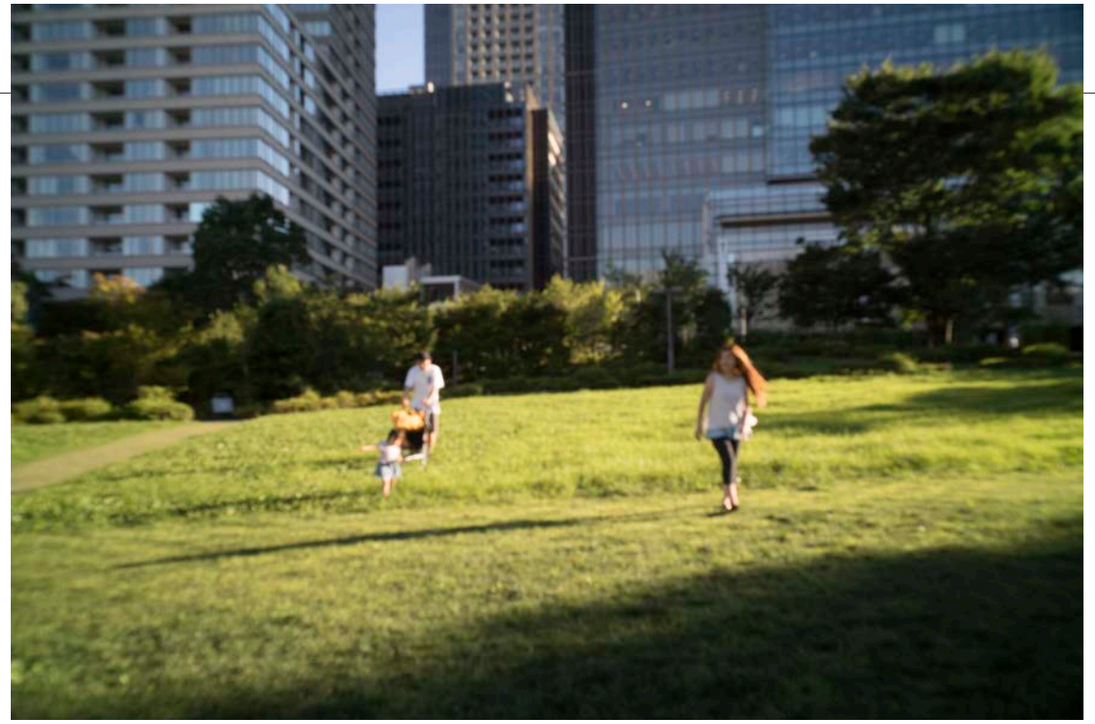
今は市販のピンホールレンズを使ったズームレンズを自作し、α7Sに付けて手持ちで撮っている。

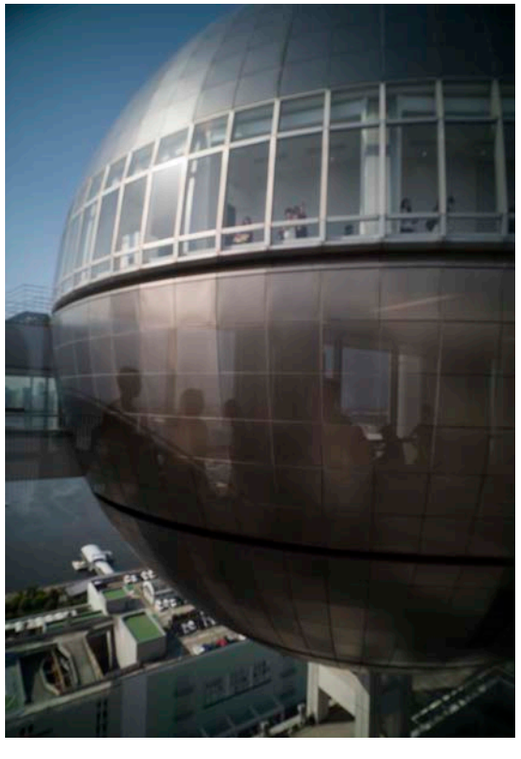
「生命が誕生した頃の動物に備わっていた眼の構造はピンホールのようなものだったと聞いたことがある」

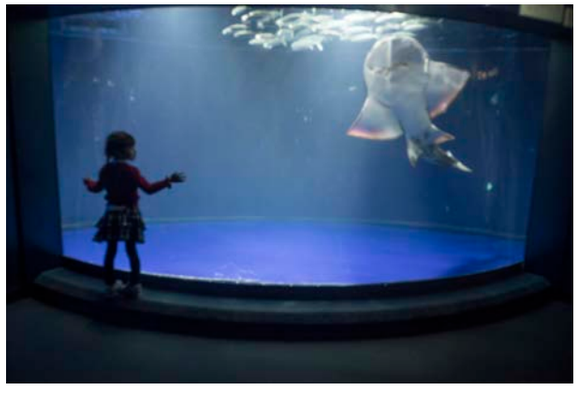
自由気ままに街を徘徊する中で、原初の眼がどんな光景を捉えるか。

「これだという確信はまだつかめていないんだけどね」

神村さんはこのBeyond Infinityに世界の終わりを探り、次作でその始まりを探ろうとしているらしい。







神村さんの撮影機材。ソニーα7Sにティルトが可能なアダプターをつけたコンタックス ビオゴンT* 21ミリ F2.8 Gとビオゴン T*28ミリ F2.8 G。

■神村光洋 写真展「Beyond infinity」
6月29日～7月4日・武蔵野市立 吉祥寺美術館 市民ギャラリー